立命館地理学　第 32 号（2020）35-48

都市とその周辺部における生と死の祭礼

―浜松地域の場合―

渡　邉　駿一朗 *

Ⅰ．はじめに

第 1 節　研究の視点

祭りは、寺社で行われるような「祀り」というイメージが強い。しかし、近年では都市の祭礼の中に宗教的性格から脱して、多くの人々に見せるためにのものもできた。たとえば YOSAKOI ソーラン祭りは、参加者が踊りを観衆に見せるという側面が強く、神仏とは一切かかわりない。このような祭りは、都市地域が拡大して、観衆となりうる十分な人口や祭りを支える経済的な基盤が確立されたことによって可能となったと考えられる。社会の変化は祭礼の変化を変化させる側面がある。逆に、祭礼を通じて形成された社会集団が地域集団と重なる場合、祭の変化によって地域内の社会関係が変化するというケースもある。たとえば、祭礼の参加者が自治会などの活動にも参加した結果、住民間の交流が増え、住民の日常生活や災害発生時の対応に大きな役割を果たす場合もある。祭礼は、地域社会の中で営まれるため、地理的範囲が存在し、地理学でも研究対象となりうると考える。

「生に関する祭り」についてみてみると、子どもの誕生や成長を祝うものとして、端午の節句や雛祭りといった各家庭で行われるものが多い。また、「死に関する祭り」については、現在は各家庭が葬儀業者と連絡をとりながら行うのが一般的である。どちらも、家ごとに行われるものである。しかし、今回調査した浜松地域では、両者の祭りとも地域集団とのかかわりの中で存在している。この研究では社会変化による影響や祭礼の性質の違いから、都市とその周辺で行われる両者の祭りの戦後の動向・変化について考察する。

第 2 節　祭礼研究史と近年の生と死の祭礼の変化

（1）都市祭礼研究史

都市祭礼とは、その名の通り都市で行われる祭礼のことをさす。しかし、先述したように、村落で行われる祭が、神や仏といったものを祀る宗教的側面が強いものであるのに対して、都市祭礼は多くの観衆に見せるというイベント的な側面も併せ持つ。こうした都市祭礼は、民俗学の研究者によって、1970 年頃から研究され始めるようになった。たとえ

* 静岡県立富士宮西高等学校
キーワード：凧揚げ、念仏踊り、祭礼、盆行事、浜松
Key words：Kite Flying, Traditional Buddhist Dancing, Festival, Bon Events, Hamamatsu

ば都市祭礼について研究した中村[1]は、これまでの民俗学の祭礼研究は個性記述的であったとして、祭礼がなぜ維持・改変されているのかという側面にまで着目して、検討を試みた。また、その後も民俗学方面からの研究が続いた。和崎[2]は都市祭礼の維持と改変の側面について、見る人々の要求によって祭礼が変化することがあるとした。そして伝統が完全に改変されてしまうと見る側にとっても伝統ではなくなり価値が失われるため、都市祭礼の維持と改変が起こりうるとした。小倉祇園太鼓という都市祭礼を対象とした中野[3]は、見る側の要求によって祭礼が変化すると指摘した。具体的には、小倉祇園太鼓に見る側が参加したいと要求したことで、地縁によらずとも太鼓を演奏するチームに参加が可能となったのである。

都市祭礼研究は従来民俗学からなされてきたが、地理学では1990年代頃から都市祭礼を取り扱うものがみられるようになった。2000年代に入ると、その2つの視点を組み合わせて、都市祭礼の地理的な拡大について要因を考察する研究が現れた。たとえば内田[4)5)]は、YOSAKOIソーラン祭りが全国的に拡大した理由として、参加者が自由に参加することが可能で、祭りの内容が変化を受け入れる前提があることに注目している。また石川[6]は日本の諸地域において闘牛の担い手の社会関係を調査し、地域外に担い手の社会関係が出ていくことが祭礼の維持要因となりうるとした。

(2) 生と死の祭礼の近年の動向

ここでは生の祭りについて、端午の節句の日の前後に行われる浜松周辺の凧揚げを取り上げた。凧揚げは「浜松まつり」の一行事として行われている。埼玉県春日部市宝珠花[7]や神奈川県相模原市新磯地区[8]に5月5日前後に凧を揚げる行事が存在する。これらの行事は、凧の上昇を子どもの成長する様子に喩えて行っていると考えられる。

死の祭りについては、仏教を信仰している家では一般的には葬儀や盆といった形で行われる。葬儀であの世に送り出した魂が、盆のときに家に戻ってくると考えられており、供養を行う。福澤[9]は、葬儀や盆などの死を扱う儀式の変化について、家族形態の変化、高齢化、景気低迷などの要因も重なり、ホールで行われていた葬儀が家族葬や直葬といったより簡易的な方法で行われるようになっていると指摘する。葬儀との関連性がある初盆の行事について、湯[10]は、滋賀県甲賀市信楽町多羅尾を例として、2005年以降は初盆の家を集めて寄合を開き、祭壇作りの簡素化や棚参りの廃止といった儀式の簡素化をするようになったと述べている。その要因としては浪費の多さ、飲酒運転の防止、若者の盆への不慣れさといった要因が考えられるという。

第3節　研究課題と目的、研究方法

都市祭礼の飛び火的な拡大については既往の研究で考察されてきた。しかし、都市化にともなって都市の隣接地域に祭礼が拡大した例について管見のおよぶ限り、これまでに考察はなされていない。都市化が生じると、周辺部では人口の増加や産業・経済基盤の確立といった現象が起きる。そして、その現象が祭礼の維持と関係していると考えられる。また、祭礼が何を目的としたものなのかという検討は行われてきていない。都市祭礼では、「参加者や観衆が楽しむ」といったもの以外にも目的があり、その内容によって祭礼が変化することもある。

第4節　研究方法

地形図や国勢調査など、各種統計データを用いて地域を概観した。また、史料により、それぞれの祭りがどのように発展してきたのか検討した。さらに、現在の団体の関係者や参加者に聞き取り調査を行うことで、各祭礼がどのように運営・実施されているのかについて調査を行った。具体的には、浜松まつりに関しては早出町（そうでちょう）自治会長と早出町中堅会会計・初家担当の者、遠州大念仏については早出組の組長に聞き取りを実施した。また初盆の執り行い方については、7月に初盆を行った家の住人に聞き取りを行った。

II．地域概観

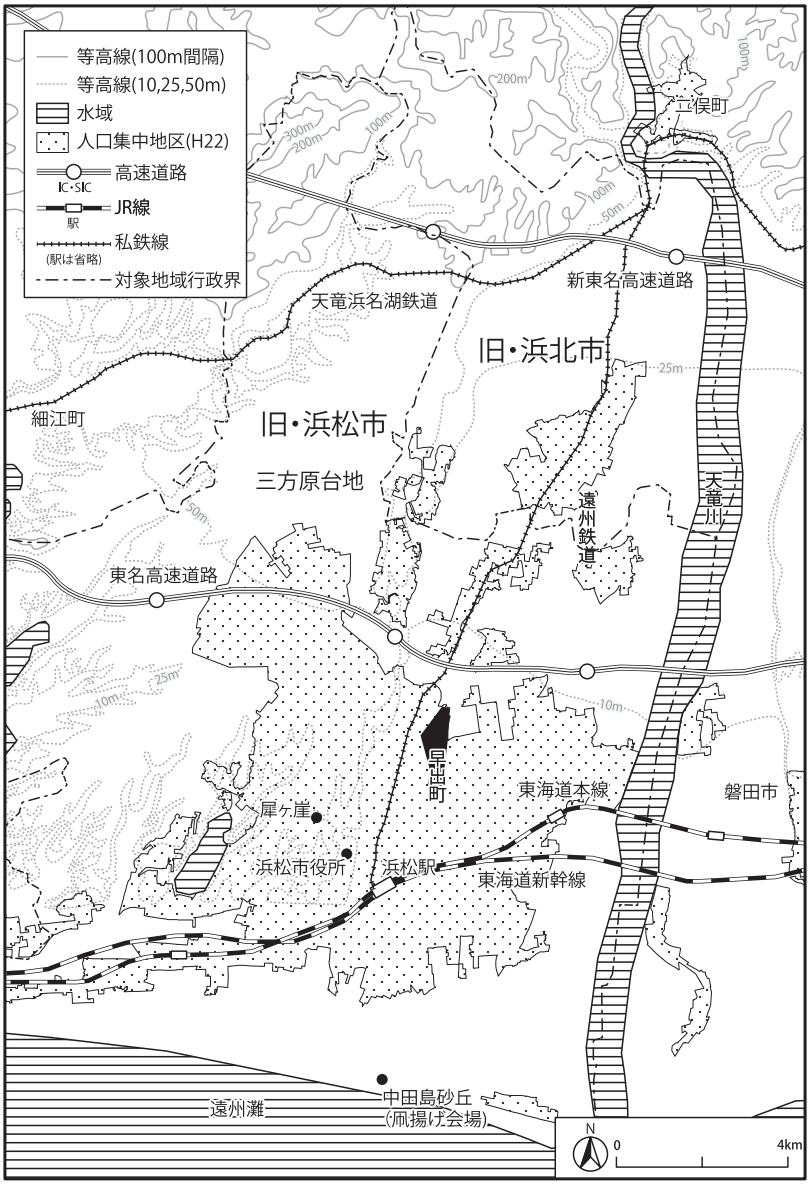
第1節　現在の浜松地域

今回の研究で対象とした地域は、第1図にあるように静岡県浜松市内の旧浜松市・旧浜北市域である。以下、この地域を「浜松地域」と呼ぶ。旧浜松市は現在の浜松市中区・東区・南区と、西区と北区の一部に、また旧浜北市は現在の浜松市浜北区に相当する。東西の交通は東海道新幹線・東海道本線・東名高速道路・新東名高速道路が東西に市域を横断する。静岡市までは直線距離で静岡市まで約65 km、名古屋市まで約100 km、東京まで約200 kmであり、比較的容易に行くことができる。しかし、浜松市から静岡市への通勤者は全就業者・就学者中の約0.57%、名古屋市へは0.32%、東京都区部へは約0.20%にすぎない。むしろ近隣の磐田市（4.73%）や湖西市（2.04%）へのほうが通勤者数は多く、約86.55%は浜松市内から外へは出ない[11]。浜松は東京や名古屋といった大都市と交通路で結ばれているものの、都市圏としては浜松を中心に周辺市町村を取り込んで独立しているとみなすことができる。このことは廃藩置県時に浜松県がおかれたこととも関係すると考えられる。

この地域の東部は天竜川の沖積平野となっており、浜松のCBDといえる浜松駅から市役所までの地域の周辺には住宅地が広がる。また、その郊外では水田や畑が広くみられる。さらに、市中心部から北西方向には三方原台地が広がり、住宅地や畑が広く分布している（第1図）。旧浜松市・旧浜北市は2005年に他10市町村と合併し、面積1,558 km^2、人口797,980人[12]と、より大きな市になった。今回研究対象地域とする旧両市域の面積が約323 km^2、人口は692,616人[13]であり、市域の人口の大半が研究対象地域に居住する。平成27年の国勢調査から作成した第2図を見ると、釣り鐘型になっており、高齢化が進んでいることが読み取れる。他方、全国人口の割合と比較すると、主に15歳未満、25歳から55歳までと、80歳以上の人口の割合が高い。25歳から55歳までの人口は生産年齢人口の大半を占め、浜松市内の産業を支える人的基盤があるといえる。しかし、近年は浜松市では出生率が低下し、代わって死亡率が増加している（第3図）。

第2節　浜松地域の歴史

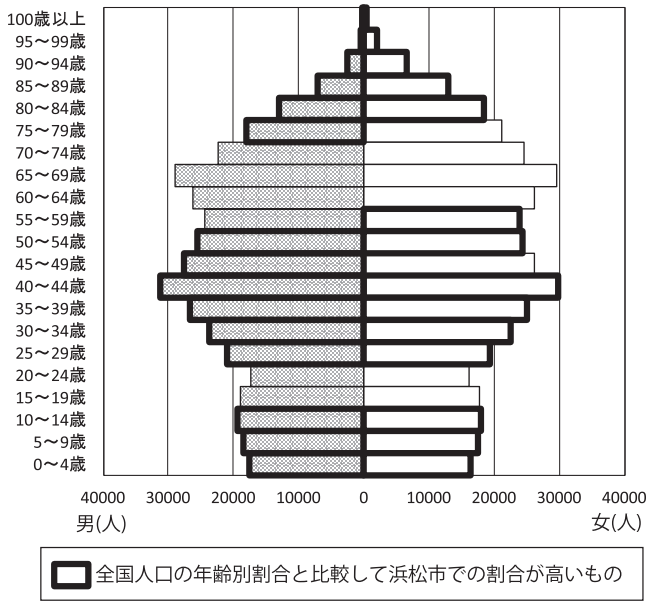
現在、浜松駅や浜松市役所がある浜松市の中心部は、江戸時代には浜松城の城下町や、また東海道の宿場町として繁栄していた。その後、明治・大正時代には繊維工業が盛んになり、それに関連して織機の製造が行われた。高度経済成長期には織機の製造技術を他の機械製造に応用するようになり、スズキ（オートバイ）、ヤマハ（楽器製造）、ヤマハ発動機（オートバイ・産業用ロボット製造）、ローラ



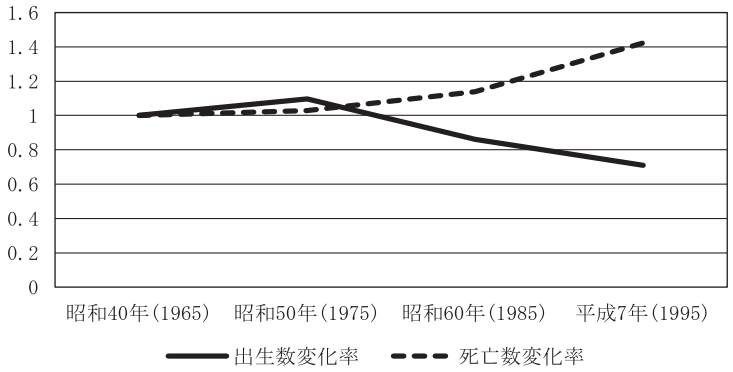
第１図　浜松地域の概観図

（トレース元の地図として 1/25000 地形図「浜松」「磐田」「気賀」（左の 3 地形図は 2016 年発行）「笠井」（2007 年発行）と Openstreetmap（https://openstreetmap.jp/）を使用。人口集中地区と行政界については国土数値情報（http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/）のデータを使用）

ンド（楽器製造）、浜松ホトニクス（光関連製品）など、独自の産業によって発展してきた機械製造会社の本社や工場が多く市内に置かれている。浜松は海外移転のしにくい独自の生産技術・生産品目による工業で発展を遂げたことが特徴的である。そのため、生産年



第 2 図　現・浜松市の人口ピラミッド
（総務省統計局ホームページ「平成 27 年国勢調査　人口等基本集計　第 4-3 表　出生の月（4 区分）、年齢（5 歳階級）、男女別人口（総数及び日本人）」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_csvDownload_&fileId=000007809777&releaseCount=2）から筆者作成）



第 3 図　浜松地域における昭和 40 年を 1 とした出生数・死亡数の変化率
（出生数は「健康福祉データの推移」（2003）の「出生数」の表（https://toukei.pref.shizuoka.jp/kenkou_seisakukan/data/02-073/documents/1041033000000216.xls、2017 年 12 月 15 日閲覧）から。死亡数も同統計の「死亡数」の表）（https://toukei.pref.shizuoka.jp/kenkou_seisakukan/data/02-073/documents/1041033000000177.xls、2017 年 12 月 15 日閲覧）から）

齢人口の割合が他の地域と比べると減少していない。

また、旧浜北市は、浜松市のベッドタウンとして発展してきた。国勢調査を見ると、浜北区から浜松市の CBD が位置する中区への通勤通学者数割合は約 11.28%と高い[14)]。このように、浜北地域は実質的には浜松都市圏の一部を構成しているといえる。

Ⅲ. 各祭礼の概要

第１節　浜松まつり

浜松まつりは、旧浜松市で行われる都市祭礼として行われている。開催日は５月３日から５月５日の連休である。市民は「町」ごとに分かれて、集団で祭りに参加する。祭礼の目的は､町内で初めて生まれた長男（以下「初子」と表記）の誕生を祝うというものである。しかし、近年は長女や次男など、長男でなくても子どもの誕生を祝うようになってきている。また、地域外から親類などの関係にある子どもを地域内に連れてきて、初子として祝うこともできる。

祭礼の内容は「凧揚げ」･「御殿屋台引き廻し」･「練り」の３つに分けることができる。「凧揚げ」とは、浜松市南部の中田島砂丘付近の広場で４帖～６帖ほどの大きさの凧を揚げることを指す（第４図）。ここで揚げられる凧には、町のシンボルが全体を占めるように配置される。その凧のうち、初子を祝うための凧（初凧）は、上の二隅のどちらかに初子が生まれた家の家紋をおき、その対角線上の隅に初子の名前を書く。

また、「御殿屋台引き廻し」は、各町内と、浜松駅から市役所の間の地域の路上にあたる市中心部会場で行われる。「御殿屋台」とは、他地域の祭礼で山車・曳山などと呼ばれているものと類似している。御殿屋台の中には主に地域の女子たちが乗り、鼓、和太鼓、篠笛などを打ち鳴らして囃子を演奏する。

さらに、「練り」とは、信号ラッパや太鼓、スポーツ用のホイッスルを鳴らし町内などの地域を歩くことである。巡行は３日から５日の夕方から夜にかけてであるが、初子の家を回る順序と屋台巡行の順序が同じというわけではない。初子の家の前で列を円形にして進み、初子の誕生を祝福し、初子の家族は地域に感謝する。一部の町では、参加者が家主に酒を飲ませ、家主が練りの参加者に食事や酒を振る舞うこともある。

第２節　浜松地域の盆行事と遠州大念仏

次に、浜松地域の盆行事と、遠州大念仏について述べる。遠州大念仏は、浜松地域、特に旧浜北市域を中心に行われている念仏踊りである（第５図）。浜松地域の一部では毎年７月頃に盆行事を行うため、大念仏も７月に盆行事の一環として実施されることが多い。

第４図　浜松まつりの凧揚げで使われる初凧
（2017 年５月５日撮影。右に写っている人物が筆者）

第５図　早出組による遠州大念仏
（2017 年７月 13 日に筆者宅前で撮影）

浜松地域における盆行事は、亡くなった人が出てから初めて迎える盆である「初盆」において華美である。盆の数日前には「施餓鬼会（せがきえ）」が行われ、盆のための準備に取り掛かる。初盆の際には高さ2mほどの盆棚を室内に用意する。その規模や様式は、他地域の葬儀と似ている。そして盆の日になると迎え火を行い、死者の魂を仏間の縁側から招き入れる。翌日か翌々日の昼に僧侶が来て供養を行い、その日の夕方になると盆の準備に参加していなかった親族や地域住民が香典を持って盆棚に参列する。家人はその返礼としてそうめんやタオルなどを香典返しとして渡す。夜になると大念仏が地域内の初盆の家を回り始める。大念仏は初盆の家の前で、供養として念仏踊りを行う。これでその日の盆行事が終わり、翌日か翌々日には送り火を行い、死者の魂を家から送り出すことになる。

遠州大念仏基本的には太鼓と双盤、節をつけた念仏の声という3つのパートで構成される。篠笛や鉦は退場時など部分的にしか使われず、静かで荘厳な雰囲気の中で行われる念仏である。大念仏は30分から1時間ほどの時間をかけて行われる。

Ⅳ. 各祭礼の歴史と地理的拡大の過程

第1節　浜松まつりの歴史

江戸時代には凧揚げは家ごとに行われるものであったらしい。荒川[15]の調査によると、19世紀には、地域内の「若衆」が凧を初子の家に送り、見返りに飲食を要求するということがみられた。しかし、その若者たちが組などのはっきりとした地域単位で統一的に参加しているかどうかは不明である。

明治時代に入ると、凧揚げは町によって組織されるようになった。これは、中村[16]によると消防組の影響が強いとされる。町ごとに作られた消防組という組織の統一性が、町での凧揚げの組織づくりに影響を与えたのである。そして浜松の町に取り込まれなかった周辺町村では凧揚げの習慣は衰退する。荒川が言うように、明治という新しい時代を迎え近代的な価値観が取り入れられるにつれ、凧揚げは旧来の習慣として廃されたらしい。また、十分な経済基盤が地域内に存在しなかったことが凧揚げの衰退した原因であったと考えられる。もともと浜松では郊外に集積していた繊維産業が近代化によって浜松の中心部へと移動してしまったことが影響したと指摘されている[17]。

太平洋戦争時に浜松市中心部は、空襲や艦砲射撃により甚大な被害を受けた。しかし、凧揚げは敗戦まもない1947年から再開した[18]。しばらくは戦前の参加町を中心として凧揚げが行われていたが、1960年代になると浜松市観光協会が、「浜松まつり」として一連の行事をまとめるようになった[19]。これによって、観光としての行政が仕切るまつりと町民にとってのまつりという2つの軸が形成されるようになったのである。

ここで浜松まつりは、1960年代には参加町はおおよそ浜松市の人口集中地区に収まる程度であった。そして、1960年から70年にかけての間に都市化が進行し、1970年代は主に都市周辺部において参加する町がでてきた。そして1990年代になってくると、より遠い地域からも参加町が出始めるのである。2000年代には旧浜北市との境界の近くの町も参加するようになった。しかし2009年以降になると参加町の増加は見られなくなった。

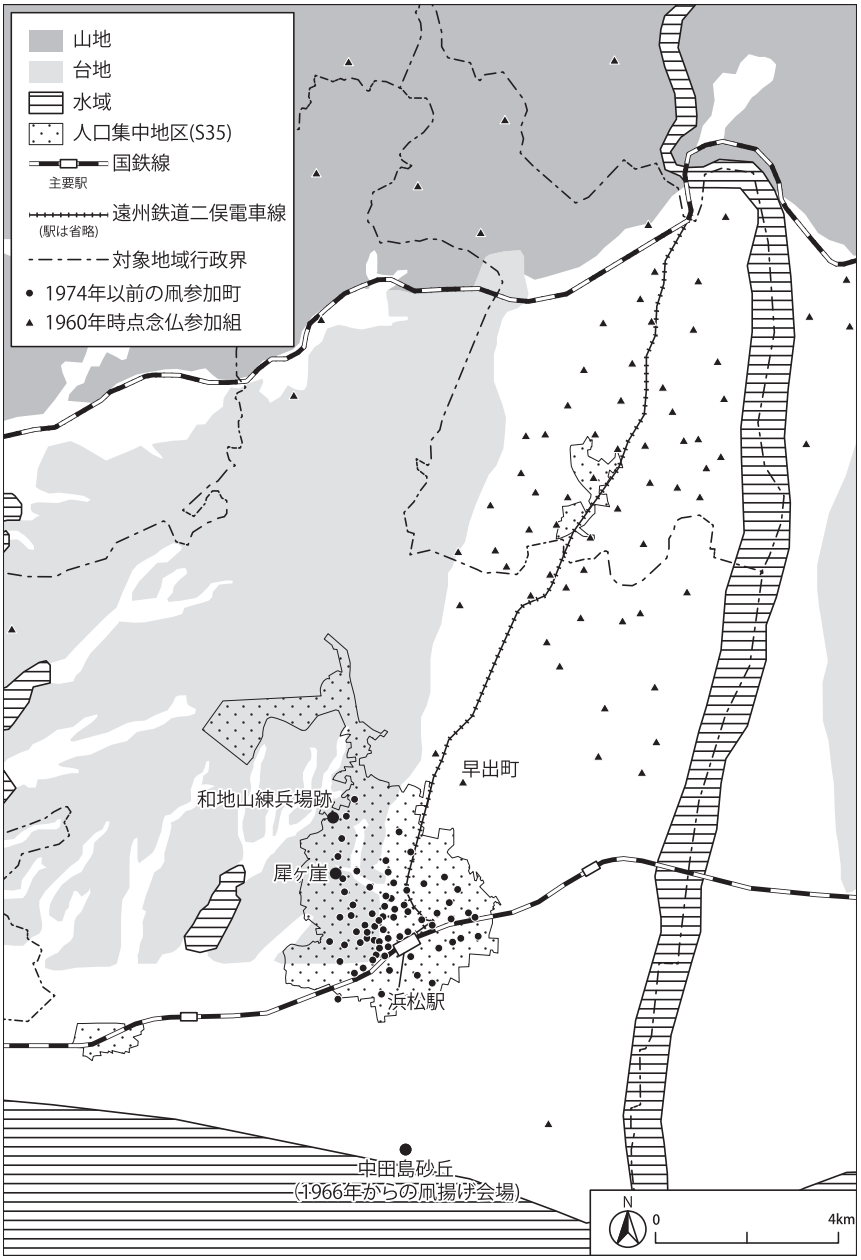
第2節　遠州大念仏と遠州地方の初盆の歴史

遠州大念仏の由来については様々な史料や言い伝えがあり、どれが史実か定かではない。ただ、死者の供養として念仏踊りが行われていたことはたしかである。大まかに共通する点として、「浜松城の北西にある犀ヶ崖（さいががけ）周辺に、宗円堂と呼ばれる建物を建てて、その前で念仏踊りを行った」というものが挙げられる。その理由としては、1583年に起きた三方ヶ原の戦いにおける戦死者を弔うためとも、それが怨念となって起きた蝗害を食い止めるためとも言われている[20]。犀ヶ崖の「犀」という部分については、死者世界の「賽の河原」の「賽」を指し示している可能性がある。これは道祖信仰と結びつきの深い「賽の河原」が由来になったものと考えられる。また、地形図をみると、犀ヶ崖より北側の三方原台地には、明治20年時点では針葉樹林や荒地が広がっており、家屋はほとんどなかった。集落を作って人が住んでいる様子はなく、日常生活を営む場ではなかったと考えられる。浜松市史に掲載されている曳駒拾遺によると、三方原という名前の由来は、三つの村の入会地として使われていたためとされており、近世の三方原は入会地として利用されていたようである[21]。また、近代以降になると、犀ヶ崖には塵芥焼却場が置かれるなど、社会的周縁性を持つ施設が設置されていた[22]。松尾[23]は社会的周縁性を持つ火葬場が都市の周縁部に置かれたと論じている。この地域の都市化が進み高等学校・大学が多く立地する文教地区となった現在でも、犀ヶ崖周辺には浜松斎場や中沢墓苑などが立地している。犀ヶ崖での念仏踊りは、非日常的な世界から来た魂を供養するために行われていた可能性がある。

念仏踊りは江戸時代には犀ヶ崖をはじめとする浜松地域の広域で行われていた。念仏踊りの集団は村ごとに存在していたようである。しかし、1827年ごろに書かれた「糀屋記録」によると、「町方は余り混雑至し候ゆへ、自然と相休み（後略）」と述べられており、次第に混雑するようになったため、浜松宿内では自然と取りやめるようになったとされている[24]。江戸時代には浜松宿の周辺の低地部の農村を中心に念仏踊りが行われていたらしい。

明治時代になると、念仏踊りは衰退傾向に入った。これを危惧した渡瀬茂三郎が念仏踊りの組を、昭和5（1930）年に遠州大念仏保存会としてひとつにまとめ上げた。「大念仏の由来や犀ヶ崖との関係を識っているものは一部の識者だけ」「只笛太鼓の調子に踊り楽しんでいるだけで、各組相互の連絡も全然なく」[25]といった状況であったと渡瀬は述べている。しかし、保存会の結成によりこれらの踊りの所作は統一された。また一時期中断されていた宗円堂での念仏踊りも再び行われるようになった。このときの念仏団の組を地図上に示すと、のちの旧浜北市域を中心に浜松地域に広く分布している（第6図）。このことは、浜北を中心として大念仏団が組織されたことを示していると考えられる。

大念仏は太平洋戦争中に一時中断されたものの、戦後復興し組数も維持された。しかし、市街化の拡大とともに大念仏が拡大したわけではなく、組の初参加としては昭和46（1971）年に浜松葵組の1組が参加するのみであった[26]。そして、大念仏保存会の名簿から名前の外れる組が平成に入ると徐々に増加傾向にある。組が活動休止になった数年後に再び参加するということもある。しかし、山間部

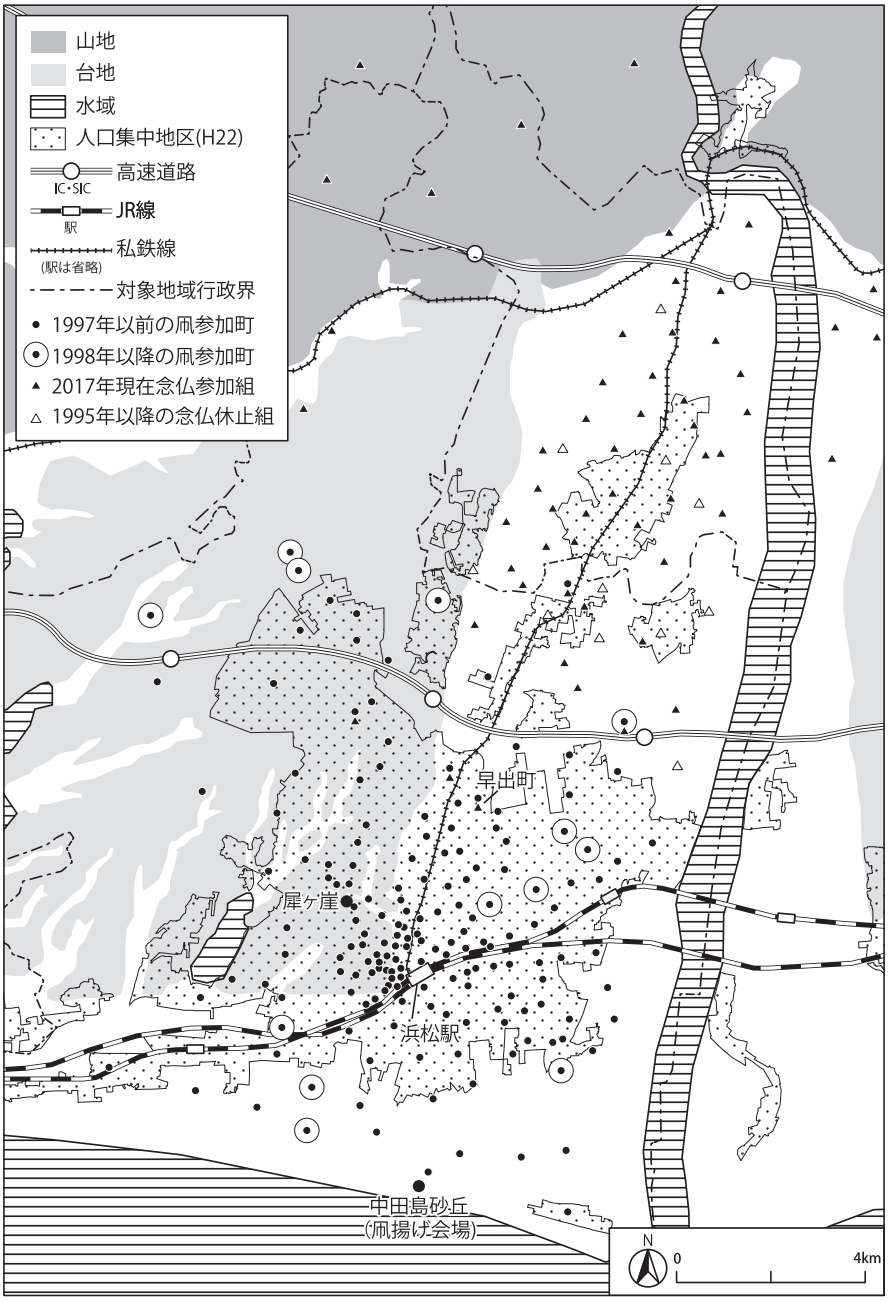


第 6 図　1960 年代の凧揚げ・念仏参加町（組）の分布
（浜松まつりパンフレット 1950 年版、大念仏団名簿 1955 年版から作成）

だけではなく、平野部でも参加休止となる組が現在でも見られるようになってきている（第 7 図）。

V．各祭礼の町・組内での運営

早出町の場合、浜松まつりの運営には、自



第７図　1990 年代後半から 2017 年現在までの凧揚げ・念仏参加町（組）の分布
（浜松まつりパンフレット 1997・2017 年版、大念仏団名簿 1995 年版、大念仏公式 HP 名簿（http://www.enshu-dainenbutsu.com/syozoku/syozokudanntai.html、2017 年 12 月 15 日閲覧）から作成）

治会・中堅会・屋台管理委員会という3つの組織が関与している。自治会は、町内に暮らす人々の日常生活を維持・向上するために作られた組織である。また中堅会は、町内での行事にかかわる組織である。そして屋台管理委員会は、浜松まつりにおける御殿屋台の管理・運行の仕事に携わる。浜松まつりの際には、この三者のもと「凧揚会」という組織が作られる。これらの組織以外にも多くの参加者がいるが、それらの参加者は回覧板などで告知される参加募集の案内から、公民館（会所）で行われる参加申し込み会で参加費を支払い、ワッペン・移動のバス券・会場での食事券・町のシンボルのついた手拭いを受けとる。ワッペンは、参加申し込み会で購入可能な法被に縫い付けるものであり、浜松まつりへの参加証となる。ワッペンの購入は町外の住民でも可能である。凧と御殿屋台は町内の倉庫に格納されており、町外の会場まではトラックなどを利用して輸送される。凧揚会の役員や、初子の父親は4月ごろに凧の糸目付けを行い、凧揚げの準備をする。ただし、練りの一員として参加する程度であれば、当日のみの参加も可能である。早出町の場合、浜松まつりへの参加者数は概数で800人ほどである。

運営のために必要となってくる資金は、早出町の場合は主に自治会からの寄付金と陣中見舞い、ワッペン費の3つによって賄われている。陣中見舞いとは地域からの寄付のことを指し、金銭以外にも飲食物やまつりで使う旗など様々なものが贈られる。町内だけではなく町外の個人・団体からも寄付がある。

遠州大念仏については、組織全体としては遠州大念仏保存会がとり行っている。この組織は渡瀬の働きかけによって成立したものであり、現在でも念仏踊りの維持のための活動を行っている。自治会の範囲ごとに「組」を作って活動しており、早出町の場合は「早出組」となる。7月初頭から、踊り方や楽器の演奏法を修練する。参加者は主に「口伝え」による案内から参加する。早出組の場合、参加人数は通常40人ほどである。活動のための資金は、初盆の家から支払われる費用と、前年度からの繰越金で賄われている。浜松市内の別の地域に移動して活動することもあり、距離に応じてバスやトラックといった自動車も使われることもある。家の宗派や死者の年齢は問わず、依頼があれば念仏踊りを行うという形をとっている。また、15日には犀ヶ崖でも大念仏が行われるが、すべての組が参加しているわけではない。

依頼者側（祝われる・弔われる側）の経済的負担を見ると、今回調査した初子である早出町自治会長の孫の場合、凧の製作費は250,000円、練りの実施に70,000円、それに他の飾り等も含めて合計349,000円であった。この費用については、普段は神奈川県に住む初子の父が支払った。初盆の家の負担としては、筆者の家の場合、1回の大念仏で200,000円、その他の初盆の費用を含めると859,904円であった。しかし受け取った香典が639,000円であり、これを引くと負担は220,904円である。両者の祭りにおいて飾りなどの量の違いがあり、家によって負担額は異なるが、いずれの祭礼でも依頼者側にとっては10万円以上かかる。

VI. 祭礼の拡大と変化

両者の祭りの拡大を概観すると、凧揚げについては都市化に伴って実施するエリアが拡

第１表　浜松地域の生と死の祭礼の相違点

	祭りの場	参加者数	資金源	依頼者側負担	祝われる／弔われる人	参加者側の活動範囲	運営団体（町・組）の分布
浜松まつり	統一会場と町内	多い	多方面から	おおむね10万円以上	地域外から連れてくることができる	凧揚げは地域外だが、祝われる子の家は地域内	都市化に伴って台地部にも低地部にも拡大
遠州大念仏	家の前（地域内外）	少ない	依頼した家から（＋繰越金）		地域外から連れてくることは不可能	弔われる家が地域外でも活動可能	拡大せず、浜北などの低地部の集落中心

大したが、大念仏についてはそうではなかった。第１表に両者の相違点をまとめている。

ひとつの理由としては、凧揚げ会場の郊外への移転が挙げられる。和地山練兵場移転後から1960年代にかけては、市街地よりも会場となった和地山練兵場寄りの町の参加が多い。さらに、風の強い中田島砂丘に会場が移転したのちには、砂丘よりの地域の参加町が特に増加している。凧揚げについては郊外に会場が移転したことや、自動車を利用した輸送が可能になったということもあり、凧や人員の運搬にかかる費用が低下し、郊外の参加町が増えた。

浜松まつりは参加者が多数であるのに対して、遠州大念仏の参加者は少ない。また、遠州大念仏の場合踊りの型がすでに定められているため、本番の前に集まって練習をする必要がある。浜松まつりの場合は、練りの一員として参加する程度であれば、事前の練習はあまり必要とされない。このような、祭りに参加する際に技術の習得が必要か、そうでないかという点が参加者数の違いを作り出していると考える。それほど厳しく型の決められていない浜松まつりの方が参加しやすい。それに加え、浜松まつりには練りなどの関係で多数の参加者が必要とされる。都市化が進行すると人口が増え、まつりに参加しやすくなると考える。

早出町の場合、ワッペン・陣中見舞い・自治会からの助成金が挙げられており、参加者が増加することによってより収入が増え盛大にまつりを行うことができる。都市化によって人口の多い地域が拡大したことによって、浜松まつりの練りに必要な人数と資金が確保できるようになった。ほかの資金源について着目してみても、浜松まつりでの凧揚会は「陣中見舞い」という寄付を町内外から集めることができる。他方、遠州大念仏保存会の場合は、初盆の家からの資金が中心である。つまり、凧揚会は地域内外から集めた資金や人的資源によって活動することができる。これに対して、大念仏保存会は初盆の家からの資金による活動が中心となり、都市化の影響を受けにくかったと考えられる。荒川が述べたように明治期に中心部に移動した経済基盤が、都市地域の拡大にともなって周辺部に拡大した結果、資金源が確保できるようになったのである。

また、祝われる・弔われる家の側から見ると、浜松まつりの場合は、親類などの関係にある初子を町の外から連れてきて祝うことも可能である。この仕組みにより、人口の少ない町であっても初子を祝うことができる。これに対して遠州大念仏では、死者の魂を町の

外から持ってくることは不可能である。盆行事の性質上、死者の魂は生前に暮らした家に戻ると考えられており、そこで供養されなければならない。そのため、死者の魂を供養する迎え火から送り火までの一連の行事は、その家の中で行われる。

ただし、遠州大念仏は死者の魂が帰ってきた家の前にでかけて供養を行うことができる。このとき地域の内外は問わない。したがって、運営側の団体という視点からすると、拡大する必要性がなかったのかもしれない。浜松まつりでは、凧印などにみられるように「町」を意識した地域アイデンティティが強く、自町内に初子がいなければ活動ができない。初子を町内にある自分の家の子として祝いたい場合、運営団体を自分の地域内に新たに設置する必要があり、結果的に運営側の地理的範囲が拡大した。

死亡数の増加が出生数の増加より遅れることが、浜松まつりと遠州大念仏の分布の違いを作り出した。特に、都市化の過程で人口が増加した三方原台地の地域では家族から死者が出ることが比較的少なく、寺院も少ない。このため、先祖を意識しながら死者の魂を供養する機会が少ないと考えられる。かつて、三方原台地は日常とはかけ離れた空間であったが、都市化の進展により多くの住民が暮らすようになり、死があまり意識されない日常的な空間として使われるようになった。その結果、遠州大念仏の成立の由縁ともかかわりの深かった三方原台地であっても、遠州大念仏がそれほど広がらなかったと考えられる。

Ⅶ. おわりに

浜松では生と死を扱う２つの祭礼があり、前者は地理的に拡大したが、後者は拡大されないまま祭礼が維持された。その理由は、前者は都市という空間の拡大に対応した変化を遂げ、後者はその都市の中に残された旧来の民俗に応え維持されたためであると考える。つまり、生の祭りである前者は都市祭礼的側面が強く、死の祭りである後者は宗教・民俗行事的側面の強い行事となっている。都市化が進んだ地域であっても、そこに残された旧来の住民の要望に応えて大念仏は維持されてきた。

しかし近年、遠州大念仏の参加団体の中では活動を休止する組が出始めてきている。その理由としては、組のメンバーが高齢化してきているためであるらしい。浜松まつりの場合は参加者数が多く、まつりの運営に携わろうという若者も出てきていると考えられる。しかし、遠州大念仏にはそのような接点が少なく、若者が入ってこないことが原因のひとつといえる。また、今後は家族葬や直葬などの簡易的な葬儀の形態が増え、初盆についてもそれに従って簡素化すると考えられる。このような社会の変化に対応して、念仏への参加者の範囲を広げる必要があると考えられる。今後の浜松に大規模な人口増加は起きにくいと考えられる。そのため、両者の祭りとも、参加者側にとっても依頼者側にとっても負担が少なく、維持可能なものへと変化していく必要があると考える。

今回の研究の課題を述べると、まず早出町を中心に調査したため、他地域の様子を把握できなかった。また、念仏組の休止についても、浜北地域でより具体的に組の状況を調べることができたかもしれない。今回の調査では、祭りに対する行政の関与という視点が抜けてしまった。今後、そのような地域ごとの

祭礼の状況の違いや、行政といった第三者のかかわり方が明らかになるような研究が必要であると思われる。

注

1）　中村孚美（1971）「町と祭り―秋田県角館町の飾山囃子の場合」、日本民俗学、77、30-53。
2）　和崎春日（1987）『左大文字の都市人類学』、弘文堂、289 頁。
3）　中野紀和（1996）「都市祭礼における流動層―小倉祇園太鼓を事例として」、日本民俗学、205、31-69。
4）　内田忠賢（2001）「都市の伝統と現在―よさこい祭りの伝播（前半）」、地理、46(12)、90-95。
5）　内田忠賢（2002）「都市の伝統と現在―よさこい祭りの伝播（後半）」、地理、47(1)、76-81。
6）　石川菜央（2005）「隠岐における闘牛の担い手と社会関係」、人文地理、57(4)、374-395。
7）　春日部市ホームページ「大凧あげ祭り（毎年5月3日・5日実施）」 http://www.city.kasukabe.lg.jp/bunka_sports/kankou/oodakomatsuri/index.html　2017 年 12 月 13 日閲覧。
8）　相模原市観光協会ホームページ「相模の大凧まつり」 http://www.e-sagamihara.com/event/may/0237/　2017 年 12 月 13 日閲覧。
9）　福澤昭司（2016）「『儀礼』から『お別れ会』へ―松本市近辺の葬儀の変化」、国立歴史民俗博物館研究報告、191、235-254。
10）　湯紹玲（2016）「盆棚に関する活動からみるイエの盆行事の現代的な変化―滋賀県甲賀市信楽町多羅尾の初盆を事例に」、人間文化：滋賀県立大学人間文化学部研究報告、40、37-51。
11）　総務省統計局ホームページ「平成 27 年国勢調査　従業地・通学地による人口・就業状態等集計　第 3-2 表　22　静岡県」 http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_csvDownload_&fileId=000007958109&releaseCount=1（2017 年 12 月 13 日閲覧）より筆者が計算。
12）　総務省統計局ホームページ「平成 27 年国勢調査　人口等基本集計　第 1 表」 http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_csvDownload_&fileId=000008040403&releaseCount=3 2017 年 12 月 13 日閲覧。
13）　前掲 12）。
14）　前掲 12）。
15）　荒川章二（2006）「浜松まつりの歴史的形成―『凧揚』から『凧揚祭』へ」、荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子著『浜松まつり―学際的分析と比較の視点から』、岩田書院、18-19 頁。
16）　中村善太（1997）『浜松凧揚祭史―凧揚祭と近代浜松地域の成立と変化』、大谷大学文学部史学科卒業論文（浜松市立中央図書館郷土資料室所蔵）、45 頁。
17）　前掲 15）、33-36 頁。
18）　荒川章二（2006）「戦後版　浜松まつりの成立と発展」、荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子著『浜松まつり―学際的分析と比較の視点から』、岩田書院、124-125 頁。
19）　前掲 18）、134-138 頁。
20）　富田準作（1960）「遠州大念仏の源流を探る」、土のいろ、100、439-441。
21）　浜松市（1959）「浜松市史　史料編四」、44 頁。
22）　浜松市（1980）「浜松市史　三」、551 頁。
23）　松尾卓磨（2016）「都市空間の火葬場にみられる社会的・空間的周縁性―近代期以降の大阪市域における立地の変遷と種々の語りに着目して」、立命館地理学、28、25-38。
24）　土のいろ社（1962）「遠州大念仏史料　由来篇」、土のいろ、101、14-15 頁。
25）　渡瀬茂三郎（1960）「遠州大念仏の沿革と現況」、土のいろ、100、402 頁。
26）　河野　潤（1981）「遠州大念仏―浜松市における現状」、田丸徳善編著『都市社会の宗教―浜松市における宗教変動の諸相』、東京大学宗教学研究室、91 頁。